

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Transformation of the Ferias : Ferias of Livestock, Agri pastoral Industrial Products, and Festive Events in a Town of Southern Extremadura

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004273

フェリアの変貌

—スペイン、エストレマドゥーラの家畜・産業・祝祭市—

黒田悦子*

The Transformation of the Ferias: Ferias of Livestock,
Agri-pastoral Industrial Products, and Festive Events
in a Town of Southern Extremadura

Etsuko KURODA

In the history of Spain some ferias have disappeared while others have survived. The former are represented by the feria of Medina del Campo in Castilla and the latter by the feria of Sevilla. This grand Andalusian city shows us how the feria can survive in a century in which peoples' dependence on agri-pastoral work tends to decrease. In the middle of the 19th century Sevilla initiated a feria-fiesta to add to her original feria of livestock, and as time went on in the 20th century, the feria-fiesta came to supersede the feria of livestock.

The town of Zafra in the province of Badajoz, Extremadura innovated around 1966 her centuries-old feria after the model of the Sevillan feria-fiesta, although maintaining her feria of livestock. As a result, in the 1980s the ferias of this town showed delicate combinations of ferias of livestock, agri-pastoral industrial products, and festive events.

On the 1st and 15th day of each month livestock market is held for small scale buyings and sellings of livestock, especially Iberian pigs. Livestock owners and merchants gather at a *bar* in the center of the town and go to the corrals to conclude their business.

At the ferias of *Mocos* (Feb. 3) and San Pablo y San Pedro (June 29), horses, mules, and donkeys, usually owned by Gypsies, are sold through Gypsy mediators called *tratantes* or *corredores*. However, these ferias of livestock have been declining since the

* 国立民族学博物館第4研究部

1960s when the “miraculous” economic development of Spain reached even this southern rural region.

At the feria of San Miguel, the biggest feria of the town in October, we may witness since the 1966 innovations many festive events and a large-scale exhibition and sale of agri-pastoral industrial products in addition to the now disappearing feria of horses, mules, and donkeys in which Gypsies participate.

As the above description suggests, Gypsies were and still are involved in the ferias as sellers and mediators of livestock. They participated in the ferias also as theatrical and rodeo performers, and a few still come as street performers. A series of ferias in this part of Southern Extremadura seems to have constituted a cycle, consisting of Fregenal de la Sierra—Llerena—Zafra—Merida and concluded by the Gypsy pilgrimages to Fregenal de la Sierra to which also the non-Gypsies of the province pay visits. This pilgrimage to Fregenal since around 1969 has increased in importance as a meeting place for the Gypsies who had ceased to visit the towns of ferias since the 1960s.

はじめに

1. フェリアのモデル——メディーナ・デル・カンポとセビーリャ——

2. サフラのフェリア

1) その由来

2) 現在のフェリア (1981-82, 1989年)

(1) 毎月1と15の日の市 (メルカード)

(2) 鼻水のフェリア (2月3日)

(3) サン・ペドロとサン・パブロのフェリア (6月29日)

(4) サン・ミゲルのフェリア (10月第1週, 第2週)

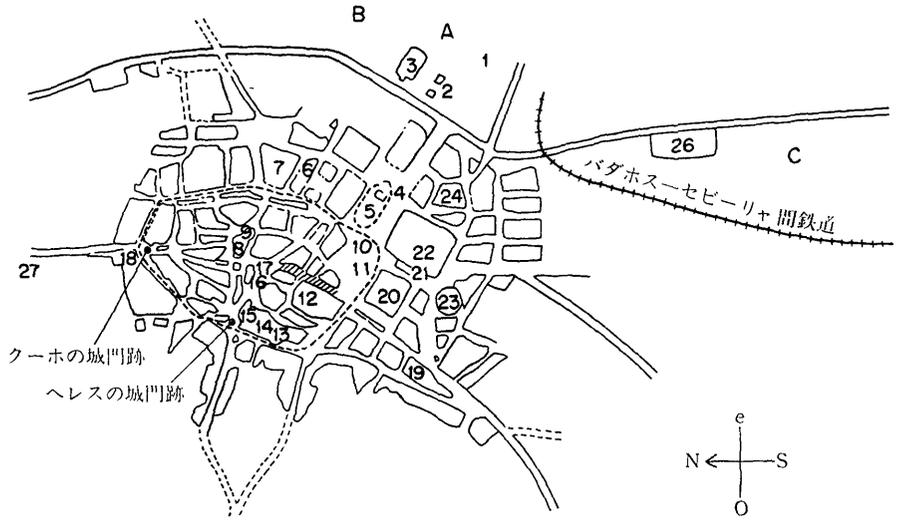
3. ジプシーの参加について

あとがき

はじめに

ヨーロッパの中世・ルネッサンス期とそれ以降の民衆文化に特徴的な風景の一つにフェリア (定期市) があった。家畜やもろもろの物品の売買、露天、物売りの声、大道芸人など、その時代の風俗が生々と姿を現わしていた。この姿は今はどこへ行ってしまったのだろうか。

スペインのエストレマドゥーラ南部のバダホス県 (地図2) にはフェリアのある町が点々と存在している。特に、フレナル・デ・ラ・シエラ、ジェレーナ、サフラ、



- | | | |
|------------------------|-------------------|---------------------|
| 1. フェリアのコーナー(1981-82年) | 11. サンタ・マリーナ教会 | 21. 郵便局 |
| 2. 赤十字 | 12. サンタ・クララ修道院 | 22. 公園 |
| 3. 公認屠殺所 | 13. サンタ・カタリーナ教会 | 23. 闘牛場 |
| 4. 交易所 | 14. 市場 | 24. サン・ミゲル教会 |
| 5. 老人センター | 15. サンティアゴ修道院 | 25. サン・フランシスコ教会の廃墟 |
| 6. 病院 | 16. 小プラサ | 26. フットボール場 |
| 7. 治安警備隊駐屯所 | 17. 大プラサ | 27. 墓地 |
| 8. カンデラリア教会(教区教会) | 18. ロサリオ教会 | //// セビーリヤ街 |
| 9. 町役場 | 19. カルメリータ修道院 | ○ 旧(黒)都(山)部 |
| 10. 公爵の城(町役場所有) | 20. エスパルニャ広場(プラサ) | |
| | | A フェリアの敷地(1989年) |
| | | B フェリアの遊戯場(1989年) |
| | | C 工場誘致のための敷地(1989年) |

地図1 町の空間配置

エストレマドゥーラの日のパンフレット, Croche [1980: 64 Recinto Amurallado], Vivas Tabero [1901: Plano de la Ciudad] を元に作成。

メリダのフェリアは大きなものとされ、それらを見聞すると、フェリアが時代の流れとともに変貌してきたことが読みとれる。端的にいうと、フェリアといえば欠かせなかった家畜市の姿が減少し、代わりに産業物産市と祝祭の場としての様相が増えてきたのである。そのように変貌しなければフェリアは存続しえなかった、というのが現

実であったであろう。

そのような変貌と、その結果としてある現在のフェリアの姿をサフラの町を例にして紹介してみたい。

サフラの人々は町の旧区画内の中心にある小プラサ（広場）（地図1-16）に来ると、そこが昔のフェリアの場であったこと、そしてフェリアの由来が中世にまで遡ることを語る。そして、旧区画外の広々とした空間に見えるフェリア用の敷地（地図1-A, B）を指差しては、1966年を境に町人の努力で旧来のフェリアがエストレマドゥーラ地方随一のフェリアに発展したことを誇りにする。確かに、この活性化は偉業ともいえよう。この地方の多くの町が過疎で悩むなかで、サフラは商業活動で活気を持ち、大きなフェリアのある立派な町として近隣で認められてきたからである。

それでは、このフェリアの活性化は町人の自前の発明であったのだろうか。発明には必ずといっていい程、前例となる失敗例と成功例があるものだが、サフラの町の場合もその例外ではない。スペインのあちこちで起こったフェリアの没落は失敗例でありうるし、サフラの近くの最大の都市セビーリャのフェリアは成功例として町人の注目を惹いてきた。このように反面教師となる前例や模範とする前例があってこそ、サフラの人々も比較的容易に、そのフェリアを活性化しえたのであろう。反面教師については町人は具体的に町の名を挙げない。そこで、私はスペイン史上の最大の没落例としてメディーナ・デル・カンポの例を挙げて、フェリアが衰退していく典型例を紹介してみよう。模範例となるのはセビーリャであり、そのことは町人が自分の町のことを「小さなセビーリャ」とよび、町のフェリアについて語る度毎にセビーリャのフェリアを引き合いに出すことでも明らかである。そこで、本稿の第一章ではメディーナ・デル・カンポとセビーリャのフェリアの辿った道を追ってみよう。

第二章では、セビーリャのフェリアをモデルにして、1966年を境にして変貌をとげてきたサフラのフェリアの現状を記述したい。資料は1981年12月 - 82年9月末と1989年10-11月に私が見聞した事実によっている。町のフェリアの由来を確かめ、現在の町で催される四つのフェリア（一つはメルカードと称されるが）を記述することで、フェリアの変貌の諸相が自ずと明らかになるだろう。

第三章では、ジプシーのフェリアへの参加についてのべたい。この地方のフェリアには家畜仲介人としてのジプシーの参加が不可欠であったからであり、また、この地方の一連のフェリアの締めくりとしてジプシー中心の巡礼があり、それに普通の町人も参加するという事実があるからである。

1. フェリアのモデル

—メディーナ・デル・カンポとセビーリャ

メディーナ・デル・カンポはスペイン中央部のカスティーリャ・レオン地方の町であり、人口は15,000人程で、サフラの町より寂れた風貌の町である。しかし、この町は15世紀中頃にはカスティーリャの代表的な定期市の立つ町としてスペインのみならずヨーロッパにもその名を知られていた。さらに、メディーナ・デル・カンポはメスタ（牧場主組合）の移牧経路上の町でもあり、ブルゴスと並んでヨーロッパ向けの羊毛の集散地として重きを成していた [KLEIN 1979: 120, 348]。しかし、16世紀の初めに国の経済の中心がマドリードに移ってからはメディーナ・デル・カンポの市は衰退し始め、同世紀末には、その黄金時代は既に過去のものとなっていた、といわれる [ELLIOTT 1965: 39, 125, 371-372]。それでも、17世紀末までは市の重要性を維持していたが、19世紀後半にまたもや変化をこうむることとなった。

19世紀には家畜市が主体であるサン・アントリンのフェリアが残っていた。1860年にバリャドリードから鉄道がのびてきたので、それと共に啓蒙主義の気運がこの町の指導者層にも及び、町の改善が計画された。そこで、サン・アントリンのフェリアを補強することも計画の一部となり、1887年にはサン・アントニオ・デ・パドゥア（縁日は6月13-15日）のフェリアが創られた。家畜、木材、果物などの売買を主としたフェリアで、鉄道と道路が開けたお蔭で、サラマンカ、アビラ、パレンシア、サモラ（以上は80 km以内）、バリャドリード（40 km以内）方面から人が集まった。この市の盛況は1895年頃まで続いた。しかし、第一次大戦後に、農業の機械化が進み、カスティーリャ地方の農業面の統合が始まり農業人口が減ってくると、家畜市を中心とするフェリアの重要性は薄れ、1950年代にはサン・アントニオ・デ・パドゥアのフェリアは廃止されてしまった。現在では、このフェリアの名残として6月13日の前後に3日間に渡って祭りと闘牛があるだけになってしまっている [LORENZO SANZ 1986: 565-566]。

つまり、メディーナ・デル・カンポの人々は19世紀の変動には耐えたが、1950年代に起こった人口の農業離れには成すすべを持たなかったのである。この間の事情については、この有名な町が出版した分厚い町史も詳しい情報をのせていない。1950年代といえば、スペインの商業発展が軌道に乗り、60年代に起こる“奇跡”の発展への助走が始まった年代であり、この年代に農牧民を対象とする従来のフェリアが衰退した

のは大いにありうることである。

そのような旧来のフェリアの限界を早々と察知し、古いフェリアを手直しし、新しい形にしつらえたのはセビーリャの町であった。このアンダルシーア最大の都市のフェリアの起源は1292年に遡るが、現在その名が知られている4月のフェリア（祭日は19-21日）は1847年に始まった。この年のフェリアは未だ農業と家畜を中心にしたものであり、競馬、闘牛、家畜のコンクールが主なイベントであった。しかし、翌年には三つのカセタ（小屋）が作られ、そこで踊り飲食する人が現われた。それから6年経った1853年のフェリアを描いた絵が残っているが、これを見るとカセタがある。三角屋根の付いた家の枠に天幕をとり付けたもので、入口にはドレープのある布が付けてあり、中では狭いところに人がひしめいている。現在のカセタと余り変わるところはない。ただ人物は異なり、正装した紳士が見える。女性は現在と同様で、セビリャーナ（セビーリャ風）とよばれるダンス服を着て扇を持っている [RODRÍGUEZ BECERRA 1984: 731-734]。

1850年代から19世紀末までにはフェリアの祝祭面が徐々に強まっていく。1850-60年代にセビーリャ周辺に鉄道網が延び、往来が便利になったので、フェリアへの人出が増え、劇と踊りと闘牛がもてはやされ、カセタの数が増加した。1864年には初めて花火が打上げられ、ガス灯が街路に姿を現わした。1870年代には祝祭的要素が一段と増え、1880年代にはフェリアは聖週間と並んでセビーリャの二大イベントとして名を馳せた。そして、19世紀から20世紀になると、過度の祝祭的雰囲気のために、フェリアが元々は家畜市であったことが忘れられることもあった [COLLANTES DE TERAN DELORME 1981]。

1937-46年には市民戦争と第二次大戦の煽りを受け、フェリアは縮小され、元々の家畜市に戻ってしまった。ちなみに、市民戦争が終わった1939年にはフェリアの祝祭面は禁止されている。こうして低迷を続けていたが、1947-56年には祝祭面が戻ってきて、賑やかになった。1956年にはフランコ総統がセビーリャを訪問し、フェリアが華々しく催された [COLLANTES DE TERAN DELORME 1982: 65-134]。それ以降、フェリアは家畜市としての重要性を徐々に失い、年々祝祭性が多くなり、アンダルシーアを代表する春の祭典となってきた。

さて、このセビーリャから北に約120 kmのところの位置するサフラは常にセビーリャを意識してきた町である。この町の周辺でも農牧業の機械化と合理化が進み、1950-60年代には家畜に重きを置いたのではフェリアの活気を維持できなくなり、人々はセビーリャのフェリアをモデルにして町のフェリアを活性化することを考え始めた。

町人のこの意向は町政の諮問委員を通じて町役場に伝わり、町役場はフェリアの改革案を練り始めた。郷土史家の意見も参考にされたことはいうまでもない。その努力は1966年に実を結び、今日の盛大なフェリアを招来する端緒となった。

2. サフラのフェリア

1) その由来

この町のフェリアの起源は14世紀に遡る。1380年にフアンⅠ世が一週間の市を許可したのが始まりで、1395年にはエンリケⅢ世によりサン・フアン（祭日は6月24日）のフェリアが許可された。ところが、1453年にはフアンⅡ世によりサン・ミゲル（祭日は9月29日）のフェリアが6日間許可され、これがサフラに定着していった。とはいえフェリアの許可は為政者の思惑に左右されるのが常で、1489年にはカトリック両王がサフラのフェリアを禁止した、と思うと、翌1490年にはその再開が認められた。イサベラ女王の死後、政情不安はあったがフェリアは生き続け、1510年には女王の後継者でカスティージャの女王フアナからフェリアの特許が与えられた。そして、1709年にはフェリペⅤ世によりフェリアを永続させることが確認された [CROCHE DE ACUÑA 1981a]。

フェリアへの参加者や商われた品目についての詳細は不明であるが、17、18世紀については少し情報がある。近隣はむろんのこと、シウダ・レアル、トレド、カンポ・デ・カラトラバ（ラ・マンチャ地方のシウダ・レアルとバルデペーニャスの間に広がる旧カラトラバ騎士団の土地）のような遠方から参加する人があり、珍しい貴重品と家畜が主に商われた様子である。また、ポルトガルから黒人奴隷が運びこまれ、17-18世紀には何人かの黒人がサフラに居たとされている。そして、20世紀になると家畜がフェリアで重要性を高めた、と郷土史家はのべている [CROCHE DE ACUÑA 1981b: 171-177]。

この史家のいう家畜とは馬、ラバ、ロバなどジプシーが扱う運搬用家畜と牛、豚、羊などの食肉用家畜の両方に言及していたと、私は思う。彼は特記していないけれども、この区別は後程かなり重要になってくる。20世紀になって、時と共に農業の機械化が進み、汽車や自動車などの交通機関が地方に及ぶにつれ、運搬用家畜の重要性は減少し、フェリアで売買される数が減ってきた。この変化はサフラ周辺では1920-30年代から始まり、1950-60年代には加速度的になり、それにつれてジプシーの家畜仲介人 (corredor とか tratante と称される) の重要性も減っていった。このままでは

家畜市は消えていくはずであるが、そうはならない。何故なら、食肉用家畜の方は需要が減ることはなく、美味で知られる“黒足のイスパニア豚”をはじめとするエストレマドゥーラの家畜はバダホス県やその他の国内市場でも競争力を持っているからである。だから、家畜といっても食肉用家畜の市場という役割を生かしていくことで、フェリアの家畜市は存続しえたのである。

運搬用家畜の重要性が減ったのは、より大きな社会変化の波の一端であった。農村では機械が男の仕事を段々と奪い、男手が大量に要る仕事というところ、秋のぶどうの採り入れとオリーブの刈り取りになってしまった。乗用車は1930年代に初めて町に現われ、年々増え、人々の距離感が変わっていった。また1950-60年代にはラジオとテレビが普及し、人々の娯楽の有り方を徐々に変えていき、以前にカトリックの祝祭暦が町人に対して持っていた重要性がとみに落ちてきた。そして、祝祭暦の一部を成していたフェリアも旧来の姿では町人の関心を惹かなくなった。

そこで、フェリアの改変が町政のテーマとなり、町政諮問委員が選ばれ、あれこれ議論をした末に、セビーリャを見習うが家畜市を維持し大切にするという方針がつくられ、1966年に実施された。これ以降のフェリアは「サフラの町のフェリア」とよばず、「エストレマドゥーラ地方随一のフェリア」と銘打ち、年々その規模を大きくしてきた。それは家畜市中心から家畜・産業・祝祭市への転換でもあったが、新旧両方のフェリアの姿が見え隠れするところが興味深い。そこで、1980年代に私はこの町のフェリアを見聞することになったので、以下に各フェリアを記述し、新旧折衷の現在のフェリアの実態をお伝えしたい。

2) 現在のフェリア (1981-82, 1989年)

以下に記すフェリアの内、(1)-(3)は1981-82年に見聞し、(4)の一番大きなフェリアは1989年の秋に目にしたものである。見聞の時間差は厳密にいうと気になることであるが、1980年代の一般的傾向を伝えるものと考えてほしい。

(1) 毎月1と15の日の市 (メルカード)

毎月1日と15日に市が立つ。これはフェリアではなくメルカードとよばれている。小規模の家畜の売買が目的で、関係者はエスパーニャ広場 (地図1-20) に面したサロン・ロメロというバル (バーと喫茶店の混合形) に集まる。この広場は1965年まで秋のフェリアが開かれていた場所であるが、今は公園になっている。サロン・ロメロはフェリアの場が町の外 (地図1-1, A, B) に移された後も名声を失わず、格の高い社交

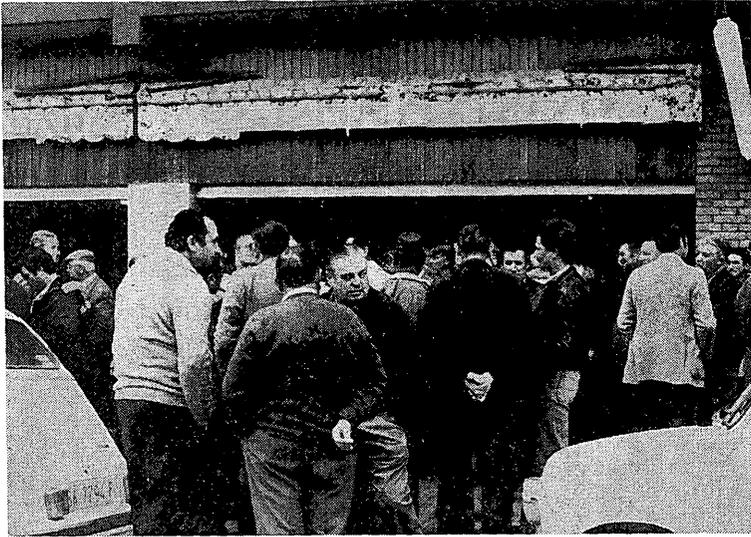


写真1 有名バルのサロン・ロメロ。男達が家畜の商談をしている。

の場とみなされているし、市の日には商談の場となる。いつもは男女の姿が見えるのだが、1日と15日の朝10時から2時頃までは男ばかりの客で一杯になる。飲み物を楽しんで家畜の商談をしているのである。話し合いがつくと、当事者は車に乗って町の外や自分の村にある家畜置場に行き、直に家畜を見ながら商談をまとめるのである。大きな動物よりも小さなもの、特に豚の取引が主だとされている。

1981-82年に会った町の或る肉屋さんはサロン・ロメロの常連だったが、1989年になると商談をする回数が減った、という。理由は、スーパー・マーケットが増え、そこで肉を売るようになり、個人の店舗での売れ行きが落ちたのである。この肉屋は50代の半ばなのだが、息子の将来を考えた末、肉屋の手助けをしていたのを止めさせ、町に新設された石油会社 Campsa の守衛に転職させた。こういう人が増えてくると、1日と15日の市の先行きは危ないのだが、これから10年程経てみなければ将来を判じることにはできない。

(2)鼻水のフェリア（2月3日）

鼻水の出る程に寒い頃にあるフェリアということであり、毎年2月3日に開かれる。この日はカンデラリアの聖母の日で春の始まる日とされているので、寒いけれども春先のフェリアということになる。この市は家畜市だけであり、1960年代まではジプシーが大勢来て、現在サン・ミゲル教会（地図1-24）が立っているあたりの空地に動物を止め、円陣を張っていた、と町人は記憶している。今では、訪れるジプシーの数も

少なくなり、フェリアの日の前日に町に姿を見せるにすぎない。

1982年2月3日の朝9時30分にフェリアを見に行くと、次のようであった。町の旧区画外にある屠殺場（地図1-3）の左手（町の城を背にして）の空地に入っていくと、あちこちでジプシーの仲介人が馬、ラバ、ロバを仲介していた。その背後に空地が広がっており、家畜運搬用のトラックや乗用車が置いてあり、その後ろが家畜のたまり場になっている。野宿の場だから、火を起こして鍋をかけている女の群が5つ程みえた。

サフラ在住のジプシーの仲介人は濃紺の背広に身を包み、竹の杖を脇に抱えて紳士風にしつらえている。常日頃は気楽な格好の人なので別人のように見える。さて、買い手が現われると、彼は言葉たくみに仲介に入る。動物を引き寄せ、お腹に手を当てて体調を判断してみせ、馬なら走らせて歩調の良さを賞めそやす。買い手が話に乗ってきて、札束を仲介人に渡し、値段の交渉に入る。売り手はサラマンカから来たジプシーの女で、皮のコートとブーツに身を包んでいる。買い手と売り手は直接話さず、真中に入った仲介人に自分の意志を伝える。この言葉を言いかえて相手に伝えるのが仲介人の役目である。ところが、この場合は、買い手の反応が上手く行かず、サラマンカの女性は怒ってしまった。これにひるまず仲介人はしゃべりまくり、双方に折合いをつけた。仲介人の手から札束が何回か左右に動き、値切りと値上げが繰返され、やっと値段が決まった。その間、40分はかかった。サラマンカの女はトラックに一杯家畜を運んできており、売る気充分だったから商談が成立した、とサフラの仲介人は



写真2 ジプシーの仲介人がサラマンカから来たジプシー女の馬を売ろうとしている。

いていた。勿論、仲介人はかなりの仲介料をもらった。誰も何パーセントの仲介料なのか教えてくれなかった。

あちこちで、このような仲介が進んでいた。しかし、何件成立したかは不明であった。ジプシー達はアンダルシーア、ウエルバ、バダホス、サラマンカ方面から来ていた。午後になると2月のためか、急に陽が落ち、寒さが身体にこたえ、鼻水のフェリアと名前がついている理由が納得できた。

この見聞からすると、2月3日のフェリアはジプシーが馬、ラバ、ロバを売る家畜市である。エストレマドゥーラのジプシーによる家畜の売買と仲介の盛期は1850-1950年とされているので [SUÁREZ 1985: 16], この盛衰のテンポがサフラあたりでは少し遅れていて、未だにその姿をとどめている、と私は判断している。1989年の秋に町を再訪した折に、同年の鼻水のフェリアへのジプシーの参加はどうだったか、と町人にたずねたところ、確実に数が減った、という答えが返ってきた。馬、ラバ、ロバを運搬のためではなく趣味的生活に使う機会が増えるなら、このジプシーの家畜市は必ずしも消滅しなくても済むのであるが、現実はその生易しくはなさそうである。

(3)サン・ペドロとサン・パブロのフェリア（6月29日）

暑からず寒からずの良い気候の下で開かれるフェリアであるから遊び事が加わるが、家畜市の規模が大きくなるわけではない。

6月28日にはシルコ (circo) とよばれる遊戯機が町の一角（地図 1-1 から道を越えて町の区画内の所）に置かれ、若者や子供が集まっている。このシルコは県庁所在地のバダホスから業者が来て営業している、とのことであった。遊戯機には二種類あり、昔からある馬型と自動車型であった。またチューロという揚げ菓子を売る露店が二軒立ち、客を集めている。これをチョコレート飲物と食べるのである。その横をジプシーが何人か歩いていく。竹の杖を手にし長髪なので、すぐそれと判る。

さて、フェリアの当日となると、町の商店は休業し、町最大のエンジン会社ディーテルも休業となる。朝8:30分頃、フェリアの空地（2月3日と同じ場所）に行ってみると、家畜の売買が見られた。この日見た仲介人には5人もの介添人が付いていて、仲介の流れをみては、つぶやくように意見をのべる。それを聞いて、仲介人が考えをまとめて、刻々と仲介を進めていく。話が成立すると、仲介人は売り手と買い手の双方から礼金をとり、それを介添人と分けるのだそうである。この間の事情はまるで劇を見ているようで、周りで見物して楽しんでいる人は私だけではなかった。

仲介人は町の外からも来ているが、町に住んでいるジプシーで普段は別の仕事をしている人も3人加わっていた。なお、この日のフェリアに参加していたのはティエラ

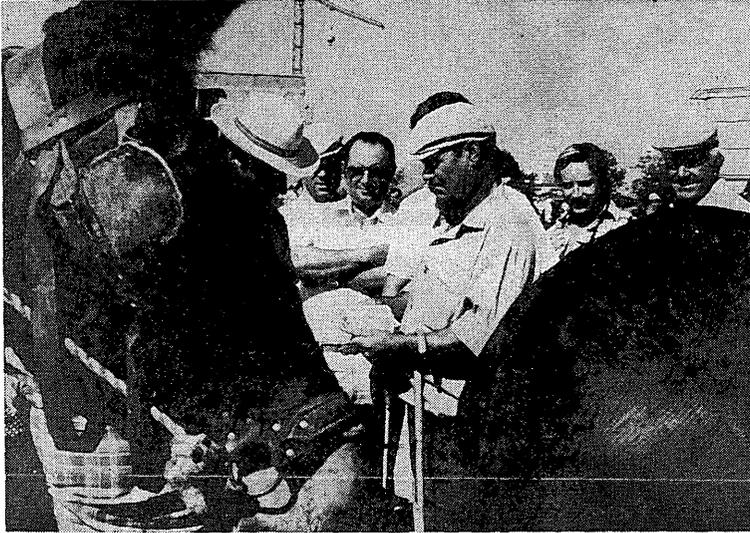
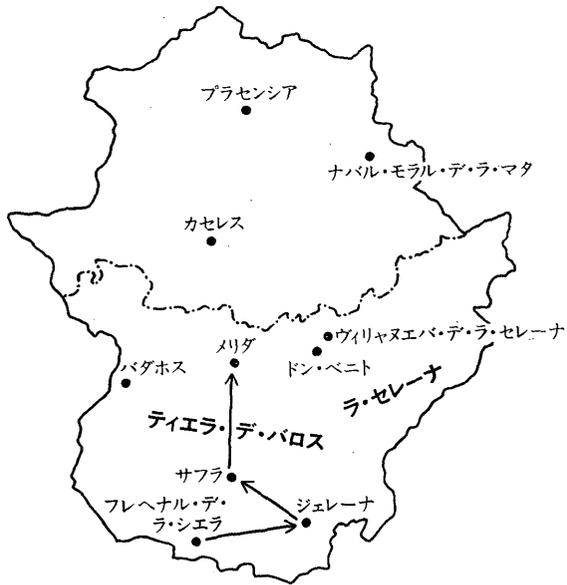


写真3 仲介が成立しそうになり紙幣が渡される。



地図2 エストレマドゥーラ：カセレスとバダホス（→はフェリアの順）

・デ・バロスとラ・セレーナの各町村（地図2），ウエルバの村の人々であった。
このフェリアが終わると，季節は夏となり，8月には耐え難い暑さが町を襲うが，9月に入ると朝夕は涼しくなり，サン・ミゲルのフェリアが日程にのぼってくる。

(4)サン・ミゲルのフェリア (10月第1週, 第2週)

この頃、平野の一部は黒土に被われ、そこには小麦などの穀物が植えてある。銀色に葉っぱの輝くオリーブの木には実がぎっしり実っている。背の高い樫の木にはどんぐりが付き、そこだけ薄若葉色に見える。緑色に続く平地はぶどう畑で、採り入れが始まっている。このぶどうの甘い匂いで蠅が発生し、畑から離れた町の家にもまで入ってくる。こうなると、町人はフェリアが近い、と感じる。「フェリアの前に雨でも降れば、牧草が伸びて、家畜も太り、フェリアが栄える」と昔から町ではいつてきた。

1989年の秋は雨が少なく、まるで初夏のように暑かった。このような天候を「マルメロの夏」(veranito de membrillo) とよび、ぶどうの生育には良くないそうだが、フェリアの準備には好都合であった。

この頃になると、毎年ジプシーが少数でも現われるが、1989年には来なかった。この年のスペイン南部では馬、ラバ、ロバ類の疫病が8月末から発生し、バダホス県南部の46の町村で予防接種が行なわれ、他所への移動が禁じられたからであった [El País Octubre 12 de 1989]。サフラの町の殉教者のバリオ (通称ヒターノ (ジプシー) のバリオ、地図1-18から19に至る街路) の近くに住む主婦の記憶によると、1960年頃まではジプシーはこの街路に大勢来ていた。着くと、街路の入口にある水飲み場で家畜を留め、水を与え、それから街路に乗り入れた。何人か共同でこの街筋の家の一階部分を借り、1か月も過ごした。この間、ジプシー同志で知り合って結婚する者もいたし、子供に洗礼を受けさせる人もいた。この頃のフェリアはエスパーニャ広場 (地図1-20) に立ったので、住みついた街路に間近で便利だったのである。しかし、家畜を留め置いたり動かすには空地が要るので、今のサン・フランシスコ教会の廃墟 (地図1-25) 近くの空地に連れて行って、円陣をつくり、曲芸を見せたという。この場所は現在、2月3日と6月29日にフェリアが開かれる場所に近いので、この方向の場所が時代が変わっても家畜の留め場だと理解できる。曲芸を見せるのはサフラに限らず、近くの村へも出かけて行って演じた、という。このことは確かで、近村のプエブラ・デ・サンチョ・ペレスの住人が子供の頃見たジプシーの曲芸を記憶している。様々な人々の話から判断すると、ジプシーの来訪は1960年代から急速に減少したが、1970年代半ばまでは、それでも数が多かったが、それ以降、減少を重ね、今はもう数少なくなったといえよう。

このようにサン・ミゲルの市ではジプシーの家畜市は衰退の一途を辿っているが、食用肉家畜の家畜市は勢いを失わない。それどころか、1966年以降、出頭数も増え、常設の建物がつくられ、1989年には「国家レベルの家畜市」と町役場がよびたくなる

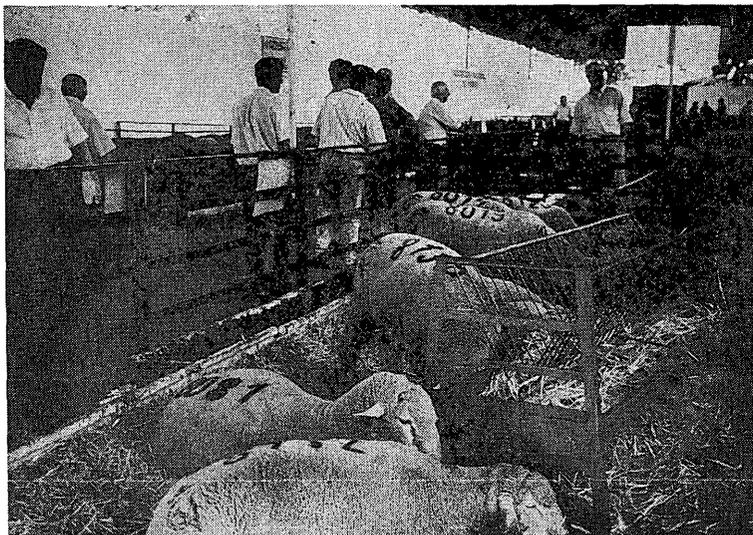


写真4 入札を待つ羊

程に大きくなった。

食肉用家畜は9月30日から常設市場（地図1-A）へ運びこまれる。家畜の種類により、建物が定まっている。入荷されたのは牛、豚、羊、山羊、鶏であった。10月2日から8日まで毎日、入札場で家畜のコンクールと入札が行なわれる。なお、フェアの初日の1日にはエストレマドゥーラの農業審議官が招かれ、会場のテープ・カットに参加する。

といった次第であるから、サン・ミゲルのフェアでは馬、ラバ、ロバの家畜市は衰えつつあるが、食肉用家畜の市は勢い付いており、農牧地帯に囲まれたこの町のフェアとしてふさわしい姿だと思われる。

食肉用家畜の売買と並んで発展してきたのが農牧業用の産業製品の展示販売である。耕作機、犁の刃、台秤、調合干し草、えさ箱、モーター、農場の囲いの締切り具、農具、水力用引綱、台所用発電機、運搬用台車、飼料切断機、庭園用具、新品種の種、などが出品されている。出品している会社は114社で [AYUNTAMIENTO DE ZAFRA 1989]、エストレマドゥーラ（バダホス県とカセレス県）、北はカスティージャ地方のブルゴス、ソリア、アラゴン地方のサラゴース、南はアンダルシーアのセビーリャ、コルドバ、それと隣国のポルトガルという範囲からである。それに、1989年にはイベリア航空会社までが参加し、1992年のコロンブス500周年祝賀のフェアに備えようとしていた。

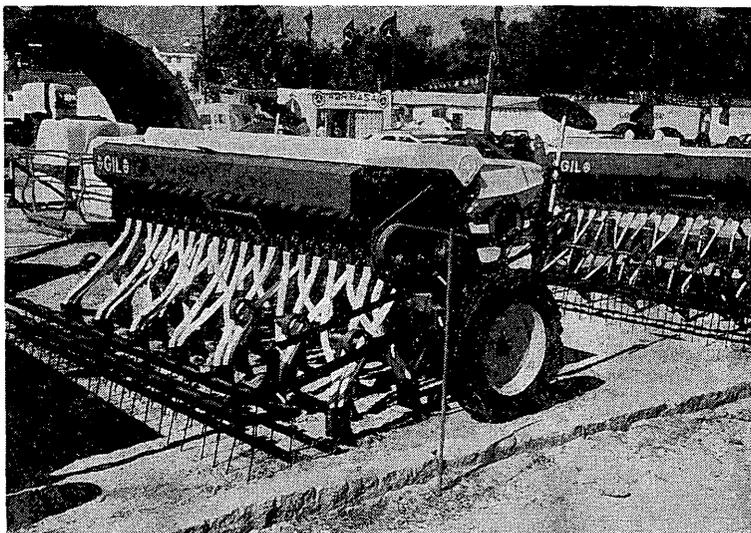


写真5 展示即売用の耕作機

1966年以降、フェリアは祝祭の時として町役場が中心となって盛り上げてきたので、文化的催物は年々派手になってきた。1989年には9月26日からフェリアの初日の10月1日まで国営ホテル（サフラの城のこと、地図1-10）の前庭で毎夕一つの文化行事が開催された。子供向きの劇、サルスエラ、劇、フラメンコ、ロック、民謡大会の順であった。こうして、一日一日とフェリアの初日まで祝祭的気分を少しずつ高めていく。

そして、フェリアの期間に入るとカセタ（祭りの小屋 caseta）が活動し始める。この町ではカセタに三種類ある。最大のもは町役場が経営するもので、10月2-7日まで楽隊が準備され、踊りと飲食ができるようになっている。1989年にはセビーリャから歌手が招かれていた。第二のカセタは町にあるエンジン会社のもので、社員は無料、一般人は有料で入場し、飲食と踊りの場となる。第三のタイプは2-3年前に現われたもので、会員でつくられたものである。生活に余裕があり、気の合う人々が集まり、役場に願い出て土地を分けてもらい、持ち寄った資金で大工を雇い、小屋を建てて、カセタとする。例えば、私の知人の夫妻は「いつもの仲間」(Los de Siempre) という名のカセタを建てたが、成員は48人で、24組の夫婦の集まりである。有名商店やエンジン会社に勤める人、教員などが主体で、趣味の合う40歳前後の人々の集まりであった。カセタは倉庫のような建物で、セビーリャのもののように装飾されてはいなかった。フェリアの期間中、夜の11時頃から集まって、飲めや歌えの楽しみようであった。

フェリアは闘牛のファンが間近で闘牛を見れる時でもある。町には立派な闘牛場が



写真6 フェリアの見物人でにぎわう闘牛場

あり、秋のフェリアの時にだけ使用される。闘牛に使われる牛は中盤戦に質の高い牛が出るようになっている。1989年には10月5日に手始めに子牛を相手に闘牛があり、6日には全国的に名の売れたサラマンカの家畜商の牛が出、7日には町の家畜商で地域で名の売れたコンデ・デ・コルテの牛が出場し、人気が高いので入場券がなかなか手に入らない。最終日の8日（日曜に当たった）には、また子牛が出たが、町出身の



写真7 揚げ菓子チューロの売店

青年闘牛士が出演したので闘牛場は満員であった。

カセタや闘牛場に行かなくても、街路には露店が立ち、祭り気分を盛り上げてくれる。城の横からフェリアの敷地に向かう目抜き街路の両側に露店がずらりと並び、セルバンテス街の所で道が左右に分かれると、その左右にも店が出ている。トゥロン（ヌガーのような菓子）など菓子を売る店、ポップコーンの店、ピーナッツの量り売り、鶏の丸焼きを売る店、チューロ（揚げ菓子）の店、干し豚の股肉を売る店、バルが並んでいるのである。食物でない物を売る露店としては藤製品、金物、馬具一式、家庭用品を商う店があり、特に左右に分かれた街路部分にかたまっている。どの店も大声で客を呼び込むので騒々しい。買物客に懸賞をつける店があり、当たるとマイクで放送するので、一段と騒々しくなる。これらの店が繁昌するのは昼間と夕方であって、夜9時頃からは客足は遊戯場（地図1-B）に向かってしまう。

この遊戯場はフェリアの期間中ずっと不夜城のように町の左手に（城を背にして）夜目に浮かんで見えている。町の旧区画内の住宅地からかなりの距離があるが町人は出掛けて行くから、遊びのエネルギーは大きい。町人だけではなく、近隣の町村からも車やバスで来て遊ぶ人が多いので、人で一杯である。特に若者の出入りの多さは誰でも気づくことであり、私の下宿にもバダホスから車で来て、一週間も寄宿し、夕方になると出かけ、朝帰りする青年がいた。こういう人に連れられ遊戯場に行ってみると、各店に一種類の遊戯機が置かれ、光と音が流れている。6月29日のサン・ペドロとパブロのフェリアと異なり、大がかりな遊戯機が多い。このコーナーを通り抜ける

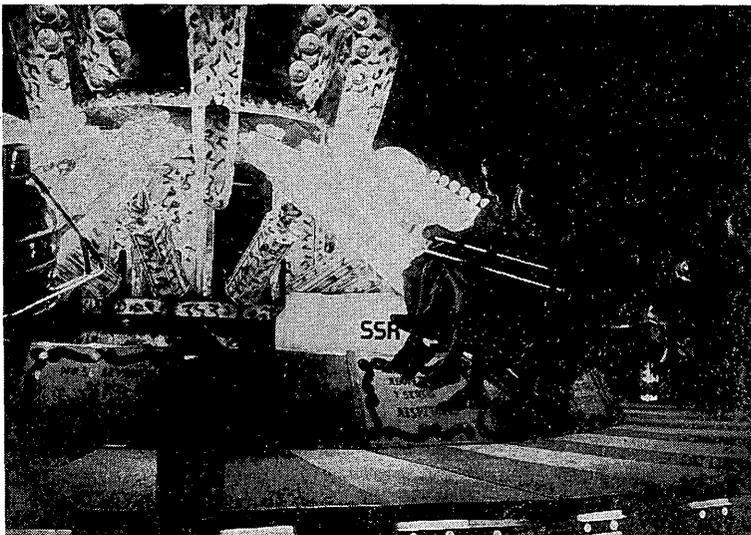


写真8 シルコとよばれる遊戯機

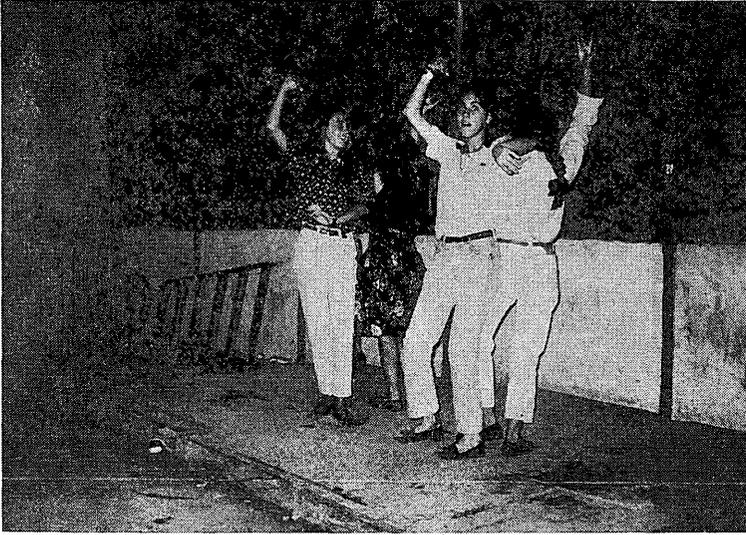


写真9 カセタ（ダンスと飲食のための小屋）で早朝までセビリャーナ（セビーリャ風）のリズムに乗って踊る若者



写真10 ジプシーの大道芸人

と露天のバル，町役場のカセタ，チューロとチョコレートを売る店が並び，酔客がうろろしている。ここで夜明けまで過ごす若者も多い。この通りの果てにはテント掛けの映画館や劇場が設営されている。

そんな喧騒とは別にひっそりと道に立つ大道芸人の姿もある。10月6日の夜に私の目にとまったのは雌山羊を台に乗せる芸を見せる老人で，音楽を奏する女性が付いて

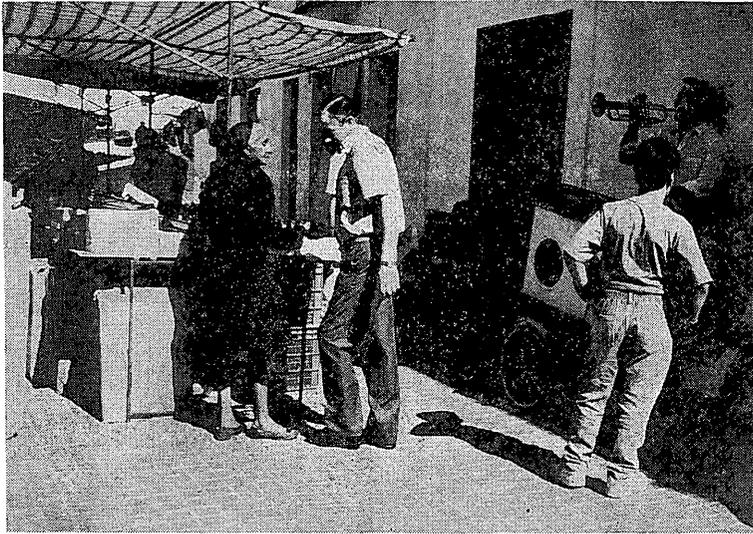


写真11 ジプシーの大道芸人——若者がヤマハのオルガンを奏しトランペットを吹き、老婆がお金を集める。

おり、老女が見物料を集めていた。毎年フェリアに来る芸人でジプシーの一種であるといわれる。同日の昼間には、別のジプシーの一家がサロン・ロメロに近い所でヤマハのオルガンをひいていた。これは台車に付けてあり、持ち運びが楽であり、若者が三曲以上奏しても誰もお金を与えないので、家族は市場の方へ場所を移した。ここは庶民的な場なので、数人の見物人がお金を与え、老婆は市場の中まで入って喜捨を仰いだ。

以上、フェリアの動きを、1)家畜市、2)食肉用家畜の市、3)産業市、4)祝祭面に分けて記述してきた。4)の部分は記述しがたく、写真と合わせて想像して頂きたい。1)-4)と見ていくと、この町の秋のサン・ミゲルのフェリアは家畜市の域を脱して、産業市と祝祭市の様相を大幅に取り入れて盛況を呈しているといえる。これは1966年のフェリア改革以来、町人が志してきたことであり、その年から数えて24年目の1989年には、町のフェリアは家畜・産業・祝祭市とよべる形に既に変貌した姿を見せている。

以上、町の四つのフェリアを概略したが（正しくは(1)はメルカード）、(2)-(4)のフェリアにはジプシーが姿を見せ、この地域の家畜市でかつては今より大きな役割を演じていたことがうかがえた。そこで、ジプシーのフェリアへの参加について僅かながら知り得たことを次に記したい。

3. ジプシーの参加について

ジプシーがスペイン北部から南部に降りてきたのは18世紀中頃とされ [SÁNCHEZ ORTEGA 1986: 48-49], この頃エストレマドゥーラ各地に分布して行ったのだろう。現在, 同地方でジプシーの人口の多い所はバダホス, カセレス, メリダ, プラセンシア, セレーナ各村, ナバルモラル・デ・ラ・マタ, ティエラ・デ・パロス, タホ河の周辺といわれるが [SUÁREZ 1985: 24] (地図2参照), 人口など詳しいことは調べられていない。ジプシーは家畜の売買とその関連の仕事をしていたが, 1850-1950年の100年間がその全盛期で, 既にのべたように, その後は交通の変化と農業の機械化により, この商売は落ち目となった [SUÁREZ 1985: 16, 20]。

サフラの町人が1960年代まではジプシーが大勢サン・ミゲルのフェリアに来た, と記憶していると前章で記したが, それは彼等の全盛期の最後の波を見ていたのである。1960年代まではジプシーはフェリアを追って歩き, フレヘナル・デ・ラ・シエラ (祭日サン・マテオ9月21日) からジェレーナ (サン・ミゲル9月29日), そこからサフラ (サン・ミゲル), 次にメリダ (ピラールの聖母10月12日) へと動いていたのだった (地図2参照)。このジプシーの動きは1975年頃までなんとか続いていたが, その後は年々消えつつある。この変化がエストレマドゥーラに定住しているジプシーの生活にどのような変化をもたらしているかについて私達は殆ど情報を持たない。

1989年のサフラの町には約80人のジプシーが住んでいる。子供を入れると100人位になるだろう, と町のジプシー協会の会長はいう。この80人の内3-4人がフェリアの度毎に家畜の仲介人になっている。しかし, この人々も普段は別の職業についている。石工, バーマン, シーツや布の販売, 宝くじ売り, 掃除係, 夏の観光地でのアルバイトなどが仕事である。旦那衆のジプシーとよばれる人々は町のバルやレストランの経営者, フラメンコの先生である。これは1980年代の現状であるが, 1960年代までは家畜に関わる仕事についていた人がずっと多かった。仲介人, ひずめ打ち, ブラシ作りなどであった。この人々はもう亡くなったか, 隠退する年格好であり, 往時いかによく稼いだかを語ってくれる。家畜の仲介人から自動車の仲介人に転じ財を成したジプシーで, 墓地にパンテオン (廟) を作った人さえいた。しかし, ジプシーが家畜で稼げる時代は去ってしまいつつある。19世紀半ばから100年以上続いた仕事がなくなつつあるのだから, ジプシーの社会は過去20-30年の間, その変化に苦しんできた。

その上, 宗教上の分裂さえ起こってきた。1960年末から米国のフィラデルフィアの

ペンテコステのエバンジェリ会（聖霊降誕の福音伝道教会、これについては San Román [1976: 54-55] 参照）が布教を始め、改宗者は聖母の存在を信じなくなり、ジプシーの慣習を無視するようになった。

そこで、ジプシー社会に起こってきた混乱を緩和するのに役立つだろうということで、以前からあったフレヘナル・デ・ラ・シエラへの巡礼が20年程前に（1969年頃）活性化されることとなった。この年代がフェリアの活性化の年代とほぼ一致することに注目してほしい。それまではサラマンカ、ウエルバ、バダホス、ポルトガルのジプシーがフレヘナル・デ・ラ・シエラのはずれににある礼拝堂に祭られたロス・レメディオスの聖母へのお参りに10月の最終日曜日に集まっていたのだが、1969年から司祭を招いてフラメンコ・ミサを行ない、フェリアに参加しなかった人々も集まり祈り楽しむ機会にしようとした。サフラでもジプシー協会が結成され、フレヘナルへの巡礼を支援している。1989年には、二人の旦那衆のジプシーが協会の推進役で、この内一人はフラメンコ奏者としてミサの壇上に立ち、その夫人はフラメンコを歌うなど積極的に参加している。

1989年には10月の最終日曜日の22日がフレヘナルの巡礼の日に当たり、その日サフラの町人と出向くと、次のような状況であった。

フレヘナルの町から6キロ離れた所にロス・レメディオスの礼拝堂がある。町に入る前に枝分かれしている小さな道があり、この道を車で行くと、裸足で歩いていくジ



写真12 フレヘナル・デ・ラ・シエラのロス・レメディオスの礼拝堂の庭に集まったジプシー



写真13 奇蹟を祈願する文章や本人の写りが額に入れてある。

ジプシーの男女の姿が目に入ってくる。これは聖母に約束事をしているか、罪ほろぼしの苦行をしているのだ、と人はいう。その横を乗用車やバスが通り過ぎていく。間もなく礼拝堂が見えてきて、道路の左右には売店や飲食店が並んでいる。この様子はフェリアと類似している。あちこちで何人か人が寄ってフラメンコを踊っている。ジプシー以外の見物客も多く、サフラの町人もあちこちに見える。

パティオから本堂の一階にはいると、正面祭壇が高い所にみえる。それは二階の部分にある。そこで二階へ通じる階段をのぼると、途中で右手に細長い通路に出会う。ここは奇蹟を祈願し、満願すると、御礼の品を置く場所である。義足や胴型がつるされているのは身体この部分の快癒を祈るためである。祈願文を顔写真と共に額に入れたものやら、恋の成就を祈願した文章もみられる。通路のどんづまりに山とつるされている結婚衣裳は結婚が成立したことへのお礼だといわれる。これらを見てから階段の方に戻ろうとすると、人が一杯で身体が互いに触れてしまう。階段に戻ると、願掛けのために膝立ちで二階までいこうとしているジプシーがいる。このことにジプシーでない人はいたく感動する。

やっと二階の踊り場に着くと、次は順々にロス・レメディオスの安置された部屋に入る。待っている人が多すぎて、ジプシーも非ジプシーも互いに身体がぴったりとくっついてくる。このような両者の身体接触はスペイン北部ではありえない、と後程バルセロナの研究者は私に論評した。

順番が来て部屋に入ると、聖母のマントの周りをぐるりとまわって正面で聖母を仰



写真14 ロス・レメディオスの聖母像——フレヘナル・デ・ラ・シエラ

ぎ見ることになる。喪中の女性のジプシーは長い間たたずんで祈っていた。内庭からフラメンコがきこえてくるので、降りていくと、ミサが始まっていた。これが終わるのを待たず内庭の向う側では小グループでフラメンコを歌い踊りだしている。

ミサが終わり、踊りの輪が消える頃には午後の陽光も落ち、バスで去り始めるジプシーも出てくる。見物人でジプシーでない人の足はもっと早く、歌ミサが終了すると去っていく。

サフラやメリダのフェリアにジプシーが大勢参加している頃には、フェリアからフェリアへと移動する動きの最後の締めくくりとしてフレヘナルへの巡礼があった（地図2参照）。ところがフェリアへの参加が減少した今となっては、フレヘナルはフェリアの輪から離れたジプシーをも含みこむための巡礼としてあるようである。この日の巡礼は本来ジプシーのものであり、同じロス・レメディオスの聖母といってもジプシーでない人々は別個に4月の第三月曜日に祭日を持っていて、この町まで巡礼にくる。しかし、その人々にとっても、10月末のフレヘナルでのジプシーの行事はフェリアの後に見るべき秋の行事として念頭にある。このジプシーの巡礼が終わると、フェリアの月である10月はおしまいになり、冬の生活に入っていくのだ、と認識されている。

あ と が き

全国的にフェアが消えていくなかで、この町のフェアは生き残った。エストレマドゥーラの農牧地帯という地の利を得ていることも確かであるが、激動の60年代に古いフェアを活性化した町人の努力も大きかった。ジプシーの関わる家畜市を残しながら、元々家畜市につきものであった農牧用品の市をより大規模な産業市にし、これも元々フェアにつきものであった祝祭的要素を大幅に増加させた、というのが改革の方法であった。それから20年以上経った現在、町で開かれるフェアを観察すると次のことがわかる。毎月1と15の日のメルカードと2月と6月のフェアは主として家畜市であり、10月のフェア（大市）は家畜・産業・祝祭市に変貌してきた。そして、この大市が小さなセビーリャとよばれるサフラの町にふさわしいものとして近隣の注目を集めている。

フェアの変貌とともにジプシーの関わりが減ってきた。2月と6月と10月のフェアの家畜市、それも馬、ラバ、ロバの市が彼等の活動の場であったが、市の規模は減り、参加するジプシーの数も減ってきた。この町のみならず他の町のフェアをも次々と追って動いていたジプシーの移動は終わりつつあり、ジプシー達が集う機会は少なくなった。そこで、フレヘナル・デ・ラ・シエラの聖母への巡礼はジプシーの集合の時として以前よりも重要になってきている。また、この地方の非ジプシーの人々も、このジプシーの巡礼をもって秋のフェアのサイクルが終わったと考えるようになってきている。これはスペイン南部の社会におけるジプシーとパージョ（非ジプシー）の長期に渡る相互依存のフォークロリックな表現といえよう。

謝 辞

本稿の概要は1990年5月23日、日本民族学会にて発表し、青柳清孝国際キリスト教大学教授と川田順造東大A A 研教授から質問を頂いた。青柳先生の「祝祭全体のスペインと中米の比較」という御質問は私がここ10年程心がけていることであり、いずれその内にまとめてみたい。川田先生の「フェアにみるテキ屋の存在」という御質問は示唆に富み、将来の課題として残しておきたい。

石森秀三助教授が原稿を読んでくださり、私の誤りや記述上の矛盾を指摘して下さいました。その御助力を有難く思っている。

1989年10-11月にスペインに出かけてフェアについて学んだ折、次の方々のお世話になった。バルセロナ大学人類学部名誉教授 Dr. Claudio Esteva Fabregat, バルセロナ自治大学人類学部教授 Dra. Teresa San Román, サフラの町の Maestro José Luis と María Carmen, Fernando と María-José, Morena 一家（以上各氏の家族名は略す）である。ここに記して、謝意を表したい。

文 献

Ayuntamiento de Zafra

1989 *Zafra y Su Feria 1989*. Zabra, Badajoz.

COLLANTES DE TERAN DELORME, Francisco

1981 *Crónicas de la Feria (1847-1916)*. Sevilla: Biblioteca de Temas Sevillanos.

1982 *Crónicas de la Feria II (1917-1956)*. Sevilla: Biblioteca de Temas Sevillanos.

CROCHE DE ACUÑA, Francisco

1981a Ciudad de Ferias y Mercados. In Ayuntamiento de Zafra (ed.), *Zafra 1981 XVI Feria Regional del Campo Extremeño*.

1981b *Para Andar por Zafra: Historia de Sus Calles y Miscelanea de Recuerdos* (manuscripto).

ELLIOTT, J. H.

1965 *La España Imperial, 1469-1716*. Barcelona: Editorial Vicens-Vives.

KLEIN, Julius

1979 *La Mesta: Estudio de la Historia Económica Española, 1273-1836*. Madrid: Alianza Editorial.

LORENZO SANZ, Eufemio (coord.)

1986 *Historia de Medina del Campo y Su Tierra*. Volumen III. Medina del Campo: Ayuntamiento de Medina del Campo.

RODRÍGUEZ BECERRA, Salvador

1984 *Guía de Fiestas Populares de Andalucía*. Sevilla: Consejería de Cultura de la Junta de Andalucía.

SAN ROMÁN, Teresa

1976 *Vecinos Gitanos*. Madrid: Akal Editor.

SÁNCHEZ ORTEGA, María Helena

1986 Evolución y Contexto Histórico de los Gitanos Españoles. In Teresa San Román (ed.), *Entre la Marginación y el Racismo: Reflexiones sobre la Vida de los Gitanos*, Madrid: Alianza Editorial, pp. 13-60.

SUÁREZ, Francisco

1985 *Gitanos Extremeños*. Madrid: Editora Regional de Extremadura.